「近・現代日本気象災害史」

宮澤清治著
イカロス出版，1999年6月，
325頁，3,200円（本体価格）

平成11年8月22日の宮崎日日新聞社会面に概略次のような記事が掲載された．

「**忘れられた教訓　33年前とまったく同じ光景だ無念さ抱き遺族ら怒り**」．昭和41年に当時宮崎市青島中学の生徒だった長女をキャンプ場の水難事故で亡くした高畑さん（68歳）夫妻は，この夏神奈川県山北町の玄倉川中洲でキャンプ中に18人が流されたニュースを聞いて，怒りにも似た気持ちを抱いたという．

同年8月14日に生徒11人と教諭2名が事故に遭ったキャンプ地は宮崎県南部を流れる大淀川の支流の中洲で，テントを張ったとき川は歩いて渡れた．しかし，翌朝目覚めたときには夜の豪雨で増水し中洲は狭まり，6メートル程だった川幅は30メートル近くに広がっていた．教諭1人が救助を求めて川を渡ったあと中洲まで届いたロープは速い流れに無力であったため，生徒達はテントを浮き袋代わりに渡り始めたが激流に抗しきれず，途中でテントから手を放し次々に濁流に飲まれた．生徒3人は奇跡的に岸にたどりついたが，残る9人は後に全員遺体で見つかった．高畑夫妻は，「日付も同じ8月14日の玄倉川の事故も，最初は騒ぎになっても何年かしたら教訓も悲惨さもみんなの頭から忘れ去られてしまう，それが悔しい」と無念そうに話したという．2つの事故は，川の中洲でキャンプした点が共通しており，大雨の原因も台風または「弱い熱帯低気圧」が大きく関わっていた．

気象庁では，広域の気象災害についてはその都度，気象庁本庁が気象状況を分析し災害記録と共に印刷物として残している．一方，狭い地域で発生した気象災害については，地方の気象官署がその時々の気象状況等を冊子にして残している．地方官署が作成する資料は発行部数が少ないため，よその地域に住む人々の目にふれる機会はあまり多くないといえる．

今回宮澤清治氏が著したような，国内の多くの気象災害記録を一冊にまとめた本はごく珍しい．宮澤氏は気象庁予報課に勤務していたころから，気象災害調査や注意報・警報基準の改善に関わる仕事に携わってきた．退職後はNHKテレビの天気解説を長く担当し，さらに全国各地で開催された防災講演会等に招かれて数多くの講演を行ってきた．著者のあとがきによると，講演の題材として講演地付近で過去に発生した気象災害を極力取上げ，講演を聞いて下さる地元の方々の耳を引付ける努力をされたようだ．講演の度にその地方の気象災害記録を読み直し，気象現象と被害との関係を自ら解釈し直して講演に臨んだと聞く．さらに，現地で災害関連資料を集めるとともに被災者からも直接話を聞くなどして原稿を書き，月刊「近代消防」に約8年間にわたって連載した．その中から今回抜粋して補訂を加え一冊にまとめている．一つひとつの災害記録を原稿にまとめるにも大変な労力を要するのに，56項目にもわたる記録を収めており，その粘り強さに脱帽するとともに，防災に携わるものとして感謝したい．

我々，予報担当者が気象情報を発表する場合，間もなく起こるであろう気象現象の解説に加えて，それによってどのような災害が発生するのかを具体的に記述することが大きな防災効果を生むと思われる．気象情報を書く予報官自身が気象災害の経験者であればそれに勝るものはないが，少なくとも，過去の気象災害を当時の気象状況と共に知識としてしっかり身に付け，目の前で発生しようとする災害を予告・警告できる力をもっていたい．これから予報官や気象予報士になろうとする方などにはぜひ読んでいただきたい本である．33年前の宮崎県のキャンプ災害の記録は取込まれてはいないが，多くの災害記録を季節別に編集しており，各季節の初めに一読してその時期の危険な気圧配置をおさらいしておくに便利である．大まかに分類すれば，台風関係15項，他の風害関係12項，大雨・土砂災害関係12項，雪害関係10項，その他7項が取上げられている．

一例をあげると，富士山の大量遭難の項で，「欺まん天気」と呼ばれる気象現象があると書いている．悪天が続いた後，激しい嵐の直前に一時的に好天が現れ風も穏やかになる．テントの中で我慢していた登山者がこの天気に誘い出されて動き始めた途端に，暴風雨(雪)が襲いかかる．冒頭の災害事例のようなキャンプ中の増水も，好天時にはなかなか想像できない現象で，悪魔が手を差し延べて誘い込んだようにも見える．

防災を呼び掛ける気象情報や解説では，「悪魔の誘い」を誰にも見える形で表現することが望まれる．そのためには，予報技術の向上と併せて災害事例の知識をより多く身に付けることが必要で，防災関係者必見の書といえよう．　　（金沢地方気象台　飯島邦彦）

© 1999　日本気象学会